離婚をめぐる母子保健学的研究

分担研究者　石井　哲夫
研究協力者　網野　武博,*　権平　俊子,*　望月　武子,*　山本　清恵*
神田　久男,*　吉川　政夫,*　加藤　博仁,*　稗田　涼子*
湯川　礼子,*　千賀　悠子,*　野田　幸江,*　福島　一雄**
栃尾　勲,***　山本　保,***　柏女　霊峰,***　石橋　悦子****

要約：①事例研究を行った。両親の離婚問題は子どもにとっては親子関係の危機であり，傷つき，情緒障害をひきおこすことになる。この場合，子どもは祖父母等周囲からも忘れられ，人間関係において孤独にされていることになる。②養護施設および情短施設の入所児童を対象とした調査結果では，パーソナリティ健康度は入所前の両親の夫婦の歪みが大きく作用している。また，実母の死別より生別の方が健康度が高く，とくに両親の離婚によって入所した児童のそれは高い。

見出し語：離婚，親子関係，情緒障害，パーソナリティの健康度

I　離婚をめぐる情緒障害事例の研究

両親の離婚は，子どもにとって親子関係の一つの危機として考えうる夫婦関係のトラブルである。本年度は両親の離婚が子どもにどう作用するか，そのメカニズムについて事例研究を行なった。代表的な事例を通して考えられることは，離婚をめぐって，その前後の両親間の精神的なトラブルによって，精神的に発達過程にある子どもが傷つけられ，情緒障害をひきおこしていることである。すなわち離婚過程のトラブル時には両親の関心がわが子から離れてしまう場合が多い。両親との関係を失った状況の中で，次第に子どもは，周囲との現実的な適応関係を失っていく。一種の自己主張としてのいたずらや空想による嘘等が目立つこともある。

この適応障害に関して二つの考え方がある。一つは学習条件を整えて適応性を育てることである。が，この考え方は登校（園）拒否児等の場合，学校（幼稚園）ではまず学習環境に入ることを拒否する子どもが多いため実践が難しい。本相談所ではプレイセラピーを通して，子どもの自我を回復させることを考えている。自我の回復はセラピストによって，より健康な面を評価し支持していくことである。子どもの自立性や自発性が期待される。並行して母親に対するカウンセリングも同様な考え方で行っている。

また現代では，核家族化されているだけに，祖父母が家族間でのかかわりが薄く，夫婦関係の調整に働くより，離婚を肯定し，これを推進する働きがみられることは意外な点である。こ

* 日本総合愛育研究所　** 共生会希望の家　*** 厚生省児童家庭局　**** 社会福祉法人嬉泉

こでも子どもの存在は両親や周囲から忘れられがちである。人間関係の空白部分の中で，幼児期を過ごしている子どもの孤独な姿が認められるのである。これは明らかに児童虐待とも言えることなのである。ここで事例毎の過程を追ってみたい。

事例A．本児8ケ月時，実母交通事故死。2歳9ケ月時，実父再婚。4歳時，継母が義妹出産。実父・継母により本児への虐待がはじまる。8歳時，実父・継母離婚。10歳時，実父失そう。その後本児は，祖母・義妹の3人暮しである。本児は小学・中学生時より，いじめの対象となっており，問題行動としては，万引，登校拒否，義妹への暴力がある。

〔治療の要点〕セラピスト二人により，内面に共感していくことと，社会性の未熟さに働きかけることの両面から本児を援助。

事例B．本児1歳時父別居し，4歳時父母離婚調停開始。問題行動としては，先生が怖い友達がいじめると言って不登園，かんしゃくが強い。母におこられると，祖母を叩く，蹴る。父親似と祖父母は言い，母はそれを不愉快に思う。また，母（有職）は保育所の対応に不信感を持ち，不満，不安あり，一方保母は「崩壊家庭」だと言う(6歳時）等，母親の混乱が激しい。現在7歳時調停成立。

〔治療の要点〕まず母親の夫に対する気持の整理をし，本児の行動に対する具体的な指導は母親と共に祖母にも行う。

事例C．本児3歳時に両親が離婚し，母子で実家に依存した生活をしている。4歳時本児骨折をし入院，母親も疲労で入院，その後運動会のことで幼稚園と折り合いが悪く，母親が園に不信感を持つ。5歳時登園拒否となる。

〔治療の要点〕実家との関係も含め，母親の経済的自立。本児の精神的安定を考える。

事例D．母親が離婚を考えたが，治まった事例——両親の夫婦関係は，暴力を奮うこと，会話のないことで妻は夫に不満を持ち，本児6歳時母親が怪我をしたことで，実家では別れることをすすめる。夫婦と夫の兄二人，妻の両親とで話し合って，夫が謝る。本児の問題行動としては，物事に関心が稀薄で自閉的なところも見られる。

〔治療の要点〕父母共に精神的に未熟さがあり，それぞれ実家からの自立が望まれる。

事例E．家庭内別居の両親——生後すぐ，夫婦不和・離婚問題の中で，本児成育。母親は父親を憎み，離婚を考えながらふみきれないでいる。本児は13歳時スーパーで万引をした。両親の葛藤の中で一人ぼっちで寂みしかったから盗みをしたと言う。

〔治療の要点〕両親が話し合い，それぞれの生き方を自覚し，生活の場を得た時，母親は「この子も辛い思いをしているのだ」と本児が置かれている状況や気持を理解できた。

II　施設入所児童のパーソナリティからみた両親の離婚が及ぼす影響

目的：養護施設及び情緒障害短期治療施設(以下情短施設)入所児童のパーソナリティの健康度について，過去における家庭環境の相違別に比較し，両親の離婚等が児童のパーソナリティに及ぼす影響について検討を加える。

パーソナリティ健康度の項目は，次の8項目

である。

1.気分が安定しており，だいたい機嫌がよい。2.快活で感情の表現が豊かである。3.ものごとを柔軟に客観的にとらえることができる。4.活発で意欲的である。5.自分の能力がよく発揮できる。6.困難なことにもだいたい耐えることができる。7.他人を思いやりうまくつき合っていける。8.人に好かれる。

方法：全国の情短施設（12園），都内の養護施設（8園）に対し，入所児童のパーソナリティの健康度，処遇の難易度，処遇上の方針，過去の施設歴，家庭環境，親子関係及び親子関係診断テストを調査，検討した。

結果及び考察：得られた回答（11情短施設の児童指導員，保母94名が担当する児童323名，8養護施設の児童指導員，保母73名が担当する児童305名，計628名）をもとに分析した結果のうち，パーソナリティの健康度について以下に示す。

パーソナリティの健康度の8項目別に，実父，実母の有無別に入所児童のパーソナリティの健康度をみると，実父，実母によって大きな相違がみられる。健康度は養護施設においては平均8.4と，おおむね健康度の中間点（8.0）をやや上回るが，情短施設においては平均6.4と，下回っている。施設入所理由の相違が，このような結果に示されている。情短施設では，両親との死別，生別によるよりも，親子関係，家庭関係の歪みを背景にして入所している児童が多い。養護施設では両親とくに実母との死別，生別によって入所している児童が多い。このうち離婚をみると，養護施設では健康度の中間点を上回っており，とくに実母の離婚によって生別している児童の健康度は実母のいる児童のそれよりも高い結果がみられた。むしろ両施設ともに，実母と死別している児童の健康度の方が，全体的に低い点が注目された。

両親の問題点の有無別にみると，問題点の無い方が実父，実母ともにその児童の健康度が高いことが確かめられた。また，両親と児童との接触が全くない児童の方が全体的に高い健康度がみられた。

表1　施設入所児の実母の有無

人数(%)

	養護施設	情短施設
実母有り	111(38.6)	258(80.1)
実母死別	39(13.6)	17(5.3)
実母離婚	78(27.2)	29(9.0)
実母行方不明	59(20.6)	18(5.6)
全体	287(100.0)	322(100.0)

表2　施設入所児の実父の有無

人数(%)

	養護施設	情短施設
実父有り	150(53.2)	207(64.2)
実父死別	32(11.3)	22(6.8)
実父離婚	41(14.5)	74(23.0)
実父行方不明	59(21.0)	19(6.0)
全体	282(100.0)	322(100.0)

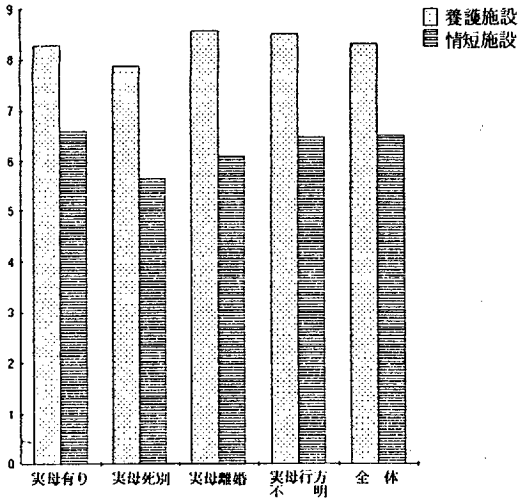

図1　実母の有無別によるパーソナリティの健康度総合得点

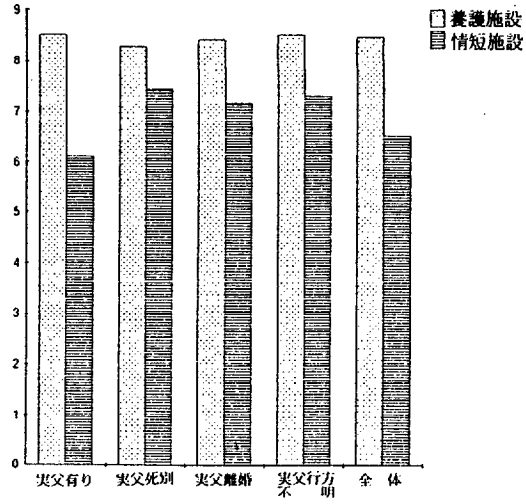

図2　実父の有無別によるパーソナリティの健康度総合得点

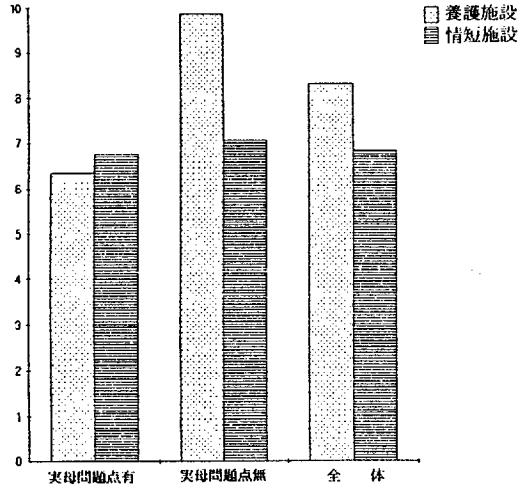

図3　実母の問題点の有無別によるパーソナリティの健康度総合得点

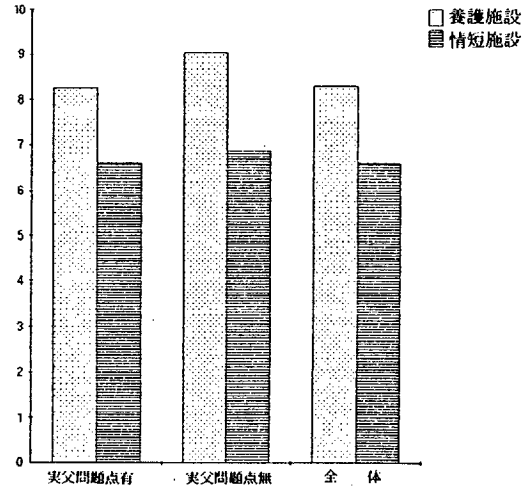

図4　実父の問題点の有無別によるパーソナリティの健康度総合得点

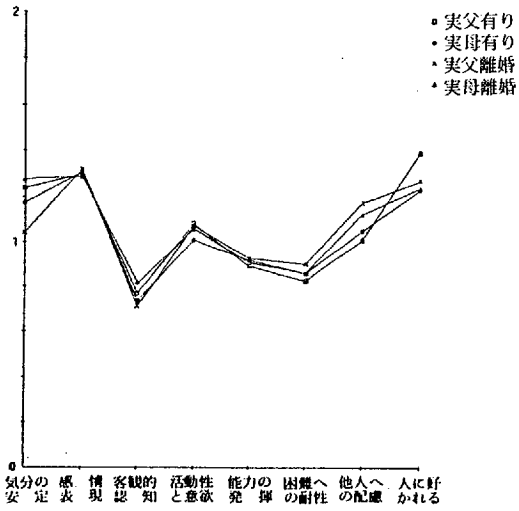

図5　実父・実母の有り及び離婚別によるパーソナリティの健康度項目得点—養護施設児の場合

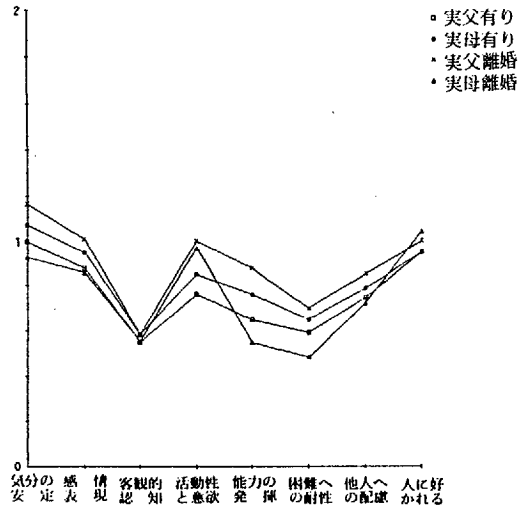

図6　実父・実母の有り及び離婚別によるパーソナリティの健康度項目得点—情短施設児の場合

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:(1)事例研究を行った。両親の離婚問題は子どもにとっては親子関係の危機であり,傷つき,情緒障害をひきおこすことになる。この場合,子どもは祖父母等周囲からも忘れられ,人間関係において孤独にされていることになる。②養穫施設および情短施設の入所児童を対象とした調査結果では.パーソナリティ健康度は人所前の両親の夫婦の歪みが大きく作要している。また,実母の死別より生別の方が健康度が高く,とくに両親の離婚によって入所した児童のそれは高い。